

ドイツ観念論における新プラトン主義の復興

——バイアヴァルテスのシェリング研究を中心として——

加藤紫苑

1. ドイツ観念論における新プラトン主義の復興

1.1 新プラトン主義の定義

「プロティノスおよび彼の影響の下にあるプラトン主義者の哲学（その際必ずしも彼の全教説を容認している必要はない）」(Merlan, 1967, p. 473) という定義は新プラトン主義の定義として穏当なものと言えよう。ただし《影響》の範囲をどこまで広げるかによって、新プラトン主義は狭義にも広義にも捉えられる。狭義には、プロティノスに始まりプロクロスを経てダマスキオスに至る3世紀から6世紀にかけての一群の哲学者達が新プラトン主義者と呼ばれる。しかしその影響を中世や近世だけでなく、さらに現代にまで及ぶものとし、狭義の新プラトン主義の影響の著しい哲学者のすべてを、広義の意味における新プラトン主義者と呼ぶこともできる。実際、最近の入門書の一つは新プラトン主義の影響をレヴィナスやデリダの内にまで見出そうとしている(小手川, 2014)。もしこのような最も広い観点を採用するならば「新プラトン主義は古代から現代にわたる一連のある種の思想運動である」(岡崎, 1998, 13 頁) と言いうるであろう。

1.2 新プラトン主義の評価の転換

《新プラトン主義》は古典文献学の発展を背景として18世紀のドイツで生まれ、19世紀になって定着した呼称であり、〈元来のプラトニズムにはない異質な要素が含まれている〉とか〈本来のプラトンの教説から逸脱している〉といった含意がある(水地, 2014, 6 頁)。この呼称の背後にあるのは〈新プラトン主義はキリスト教思想と共にプラトン解釈に混入した不純物・夾雑物であり、プラトンは新プラトン主義やキリスト教思想と分離され、その原典テキストのみに基づいて解釈されなければならない〉とする見解である(岡崎, 1998, 7-8 頁)。19世紀から20世紀にかけて新プラトン主義研究が積極的に評価されないという風潮が生まれ、広く浸透するにあたって、この否定的な見解が果たした役割には無視できないものがある。

しかし20世紀の末頃から新プラトン主義研究をめぐるこのような状況は徐々に変化しつつある。第一に、プラトン研究の内部においても一種の反動が生じている。つまり、現

在のプラトン研究にとって新プラトン主義は「元来の立場からの逸脱を含む、新たな可能性の開花」と見なされ、そのプラトン解釈は「プラトン自身の意図とは異なる側面をもっていたとしても、プラトンを読む一つの可能性」として再評価されている (納富, 2014, 22–23 頁)。第二に、西洋哲学史の研究——それは「哲学史の書き換え」の時代に入っていると言われる (福谷, 2009, 27–28 頁)——にとっても、新プラトン主義の研究は重要な役割を担っている。というのも、広義の新プラトン主義を軸に据える哲学史研究は、哲学史を時代別に「輪切り」にする従来の哲学史の概念が無効となる局面において初めて成立するからである。つまり、むしろそれは時間軸を「縦に截る」考察を、その限りにおいて西洋哲学史の全てを視野に入れ、それを全体として問題とする態度を要求するのである (岡崎, 1998, 13 頁)。

1.3 ドイツ観念論と新プラトン主義

広義の新プラトン主義の展開において要となる里程標を近世哲学に求めるなら、第一にルネサンスの一群の哲学者 (クザーヌス、フィチーノ、ブルーノなど) の名を挙げなければならない。しかし同時に、17 世紀のケンブリッジ・プラトニストと並んで、18 世紀末から 19 世紀初頭におけるドイツ観念論もまた近世における新プラトン主義の展開にとって見落すことのできない重要な里程標である。

よく知られているのはヘーゲルと新プラトン主義の関係である。ヘーゲルは (狭義の) 新プラトン主義の内に古代哲学の完成 (プラトンとアリストテレスの総合) を見ただけでなく、それを自らの思弁的形而上学の模範 (先駆) とも見なした。同時代の人々にとっても一者ないし絶対者の自己展開の《三項構造》に見られるプロクロスとヘーゲルの親近性は自明のことであった (Halfwassen, 1999, pp. 14–19)。

しかしヘーゲルだけでなく、フィヒテとシェリングにも明白な新プラトン主義的傾向が認められる (伊藤, 2014, 360–361 頁)。ただしその具体的内実は三者三様である。フィヒテについては別の機会に譲り、今はシェリングに話を限定するならば、彼の場合にはルネサンス期の新プラトン主義、特にブルーノとの密接な関係が他の二者にはない際立った特徴をなしている。したがって〈ドイツ観念論における新プラトン主義の復興〉という事態をシェリングに即して明らかにしようとすると、この両者の思想的連関の解明が中心的課題の一つとなるであろう。

1.4 小論の課題

もっともドイツ観念論における新プラトン主義の影響に関する研究は、すでに重要な業績はあるものの、全体としては未開拓の分野と言ってよく、シェリングの場合も例外ではない。特にこの問題（ブルーノからシェリングへの新プラトン主義の展開）に正面から取り組んでいる先行研究は少なく、その中で最も重要なのは、新プラトン主義研究の重鎮バイアヴァルテスの『同一性と差異』——それは〈同一性と差異〉という主題に焦点を絞って古代から現代に至る新プラトン主義の展開を叙述している——である⁽¹⁾。以下では、この書の第9章「絶対的同一性——シェリング『ブルーノ』における新プラトン主義的含意」の内容を概観することにより、研究の現状を確認するとともに、その展開の可能性を探りたい。

2. バイアヴァルテス「絶対的同一性」の概要

バイアヴァルテスの論考は内容上三部に分かれる。最初に考察の前提、目的、方法が述べられる。次いでプロティノスとの類比を念頭にシェリングの同一哲学の特徴が叙述される。最後にシェリングの『ブルーノ』と新プラトン主義的思考との関係が詳述される。

2.1 考察の前提、目的、方法

2.1.1 考察の前提：シェリングとブルーノの関係についての基本的理解

『スピノザ書簡』第2版（1789年、初版1785年）⁽²⁾の出版に際して、ヤコービは入手困難であったジョルダナーノ・ブルーノの対話篇『原因・原理・一者について』（以下『原因論』と略）の抜粋を付録の一つとした。信頼の置けるテキストが与えられたことによって、同時代の人々にとってこの対話篇におけるブルーノの中心思想に関する正確な理解が初めて可能となった。この抜粋の内にシェリングは自分と同一の精神をもつ思考を見出した。「影響史が単に知識や、あるいは（もしかすると判断中止を伴う）テキストの解釈を意味するだけでなく、各人の思考を引き続き規定し続ける産出的獲得を意味するならば、影響史は本来ただシェリングの哲学においてのみ実現された」と、バイアヴァルテスは両者の出会いの意義を強調している（ID 205）。なかでも絶対者についての問いの仕上げがシェリングにとって特別に重要であった時期（〈同一哲学〉期）に成立した「同様に対話形式で書かれた」著作『ブルーノ』（1802年）は「ブルーノの思惟に対して単に外面的な関係にある」のではなく、むしろ「〈同一哲学〉の地平におけるブルーノの中心思想と新プラトン主義的な諸含意の変形」と解されるべきものである（ID 205）。

2.1.2 考察の目的：類縁性（Affinität）の解明

ただしバイアヴァルテスの論述の主眼は「シェリングの『ブルーノ』についての完備した、あるいは思想の運動の全体を反省する解釈」にはない (ID 205)。むしろ彼の論述は同一性と差異の關係に問題を局限して「まさにジョルダノ・ブルーノに直面することによってシェリングが真正に新プラトン主義的な諸要素を彼の思考に取り入れた」という事実を裏づけようとする (ID 205)。つまりバイアヴァルテスによると、シェリングの哲学的思惟は彼の第二の時期 (1801 年以後) 以来、思考の形式をはじめ他の複数の構想において新プラトン主義、特にプロティノス哲学に対する特別な類縁性を示しているが、この類縁性の解明が目下の課題とされるのである。この類縁性にとって決定的なのは、シェリングの思想に見出される次の要素である。すなわち〈絶対者は一なるものあるいは根源的統一である〉、〈絶対者は思惟と存在との自己自身を肯定する同一性である〉、〈絶対者は存在者の発出と還帰の円環を構成する〉、〈自然は精神の産出性として解されうる〉、〈知的直観は体系内においてプロティノスの脱自と類似の機能を有する〉等々である (cf. ID 205–206)。

2.1.3 方法論上の注意

しかしシェリングと新プラトン主義との類縁性を解明しようとする、同時に両者の差異も考慮に入れざるをえない。というのも、時と場所を隔てて行われる思想の歴史的継承は断絶をとまなわざるをえず、シェリングの新プラトン主義もまたプロティノスの思想がもつ本来の意味や機能と完全には同一視されえないからである。それゆえ——バイアヴァルテスは言うのであるが——体系 (学説の全体) を比較しようとしたり、相互に異なる歴史的前提や意図などを全体として主題化しようとしたりするなら、差異をより一層強調することになり、挙句の果てに両者は完全に異質なものと判定されてしまう。しかしこれは当初の目的 (類縁性の解明) に反する。それゆえ、バイアヴァルテスは意図的に、もっぱら両者の体系の〈一部〉や思考の〈形式〉 (思考パターン) に注目し、可能な限り多くの類似性を指摘しようとする。例えば、〈有機的総体としての統一〉というシェリングのドイツ・ロマン主義的な体系構想はもちろんそのままの形ではプロティノスには見出されない。しかし単に部分的にシェリングの体系における〈一と多〉の論理的構造にのみ着目するならば、類似の構造がプロティノスの精神 (ヌース) にも見出されるのである (cf. ID 207–208)。

2.2 プロティノスに対するシェリングの同一哲学の類比

このような方法を用いて類縁性を見出そうとすると、対話篇『ブルーノ』におけるシェリングの同一哲学の体系にはどのような新プラトン主義の特徴が見出されるのであろうか。

2.2.1 同一哲学の基本的性格：新プラトン主義の復興

バイアヴァルテスによると、シェリング『ブルーノ』の全領域を規定している根本思想は〈対立の統一〉である。存在者全体を構成するとともに有限な思考を導く対立として挙げられているのは、以下の諸対立である。つまり、有限と無限、制限と無制限、特殊と普遍、直観と思惟、可能と現実、活動と静止、数多と統一、存在と思惟、客観と主観、そしてあらゆる他の諸対立を包括する最高の対立として、実在的と観念的である。しかしシェリングにおいては存在者の全体は諸対立の集積ではなく、その〈有機的〉結合である。この結合の根拠は〈最高の原理〉にある。この原理は、あらゆる諸対立を〈廃棄されたもの〉として自己の内に含むという仕方での、それらの統一である。それゆえ、この統一は〈対立に対立する統一〉ではなく〈そこにおいて統一（つまり対立に対立する統一）と対立が一つである統一〉である。このような統一をシェリングは絶対的同一性もしくは絶対的無差別と名づける (cf. ID 208–211)。

シェリングがこの統一を〈絶対者（最高の存在者）〉と同一視し、上述の対立概念をその〈述語〉と解していることが彼の同一哲学の根本的特徴をなしている。したがってシェリングの哲学は、絶対者に原理を持ち、存在者の全領域における絶対者の展開を試みるという意味で——カントの超越論的観念論の基本構想から出発しながらも——古来の新プラトン主義的な形而上学がもつ存在=神論的な根本的特徴の復興と解されうるのである (cf. ID 211)。

2.2.2 同一哲学の基本構造：三重の反省

バイアヴァルテスは、このような根本的な特徴をもつシェリングの同一哲学の体系の基本構造を、その自己反省的構造に注目しつつ、同時に生起している三重の自己反省ないし自己還帰の運動として叙述している。

絶対者の自己反省 バイアヴァルテスによると、シェリングの同一哲学の根幹に据えられているのは新プラトン主義的伝統において《絶対的自己反省》と呼ばれているものである。《絶対的自己反省》とは〈思考することによって自己を自己自身と一つにする、あるいは自分自身を介して自分自身へ還帰する絶対者の作用〉のことである。この意味において「絶対者は絶対的認識あるいは絶対的反省である」(ID 214)。

しかしこの事態をシェリングは〈自己自身による（絶対者の）絶対的肯定〉と解している。つまり、絶対者は肯定するもの（思考する主観）と肯定されるもの（思考される存在、客観）との反省的同一性なのである。しかしこの認識は絶対的認識として——つまり有限な認識とは異なり——存在に対立する思考ではなく、思考と存在を既に統一されたものとして自己の内に保持している思考（思考と存在の絶対的同一性・絶対的無差別）でなけれ

ばならない（シェリングの絶対者は諸対立を諸対立としては廃棄する、つまり、それ自身は両者の対立を超えている統一であった）。

その限りにおいて絶対的同一性は、自己の絶対的同一性そのものの自己認識である。すなわち、絶対者の自己肯定は、絶対者の自己自身への出現（自己対象化）として理解されるが、ただしこのような自己対象化は絶対者の内部に二重の差異（主客の差異および諸客観の差異）を産みつつも、それを固定化するものではない。むしろこの差異化はそれ自体、差異を廃棄するものなのだから、この作用において絶対的同一性にとって出現するもの、あるいは対象的になるものは、いかなる差異によっても濁らされていない絶対者そのものにほかならないのである（cf. ID 214-215, 217-218）。

絶対者における精神の自己反省 絶対者における肯定するものと肯定されるものの絶対的同等性は、肯定するものも肯定され、肯定されるものも肯定する、ということを含意する。認識の両側面は自己の内に他の側面を持ち、この側面であるのは〈他〉の側面からみられている場合である。ここで絶対者の自己肯定における、このような〈他〉の契機に注目すると、この契機（いわば絶対者の自己認識の複数の通過点としての諸客観）がアイデア（イデー）と呼ばれているものにほかならない。アイデアというのは〈ばらばらな〉個物ではなく、個物でありながら同時に全体つまり宇宙そのものであるようなもののことである。

絶対者において個物（有限なもの）は個物（有限なもの）としてではなく、無限なもの・宇宙全体としてあるという事態を可能にしているのは、アイデアの特殊な構造である。つまりアイデアは、ライプニッツのモナドのように、宇宙そのものを表出する精神的実体である。このような精神的実体として有限なものないし個物は自己の内に宇宙（マクロコスモス）を映している小宇宙（ミクロコスモス）であるが、逆にこのときこの個々の実体をもつあらゆる視点において同時に同数の、つまり無数の中心（宇宙）が現出している、ということになる。

したがって、ここには絶対者そのものの自己反省とは別に、アイデアを起点とする全体と部分の相互反映という自己反省的（自己還帰的）な構造が見出される。すなわち「この精神概念においては動的な統一に基づいて個々のアイデアは全体であり、逆に精神は唯一のものとして、思考の異なった出発点としての個々のアイデアにおいてのみ、自己を全体なものかつ唯一のものとして反省しうるのである」（ID 218）。ここにバイアヴァルテスは、プロテイノスの精神（ヌース）の概念との事柄上の類比を見ている（cf. ID 212, 216-218）。

有限な認識の絶対的な認識への還帰 アイデア（イデー）は絶対者において無限なものとして動的に一つである有限なものである。これは、そのような在り方を喪失し、絶対的なものの領域（絶対的同一性）の外へと転落した有限なものとは区別されなければならない。しか

しこの後者の在り方こそがわれわれの常態である。つまり、われわれは絶対的認識を喪失したものとして常に既に有限な認識から始めなければならないのである。

しかしシェリングの同一哲学は絶対者だけでなく、絶対者のこの無差別を経験しうるような、有限な認識における超越論的な能力（知的直観）についても反省している。この能力は、純粋に経験的で有限な認識を超越するための、すなわちこの種の認識にとって本質的な主観・客観関係を放棄するための前提である。バイアヴァルテスによると、このようなものとしてシェリングの知的直観はプロティノスの脱自（エクスタシス）と類似した位置を体系内で占めている。

有限な認識を超越しようという思惟の運動の目標は、絶対者についての知と絶対者そのものが一である点である。まさにこの点において、無限なものが有限なものへ侵入すると同時に、有限なものが無限なものへと転換される。それゆえ、このような有限な知の領域から出発する無限と有限の無差別の遂行にもまた、ある種の自己反省的・自己還帰の構造——ただし今度は有限な認識を起点とする運動が——見出されるのである（cf. ID 220–221）。

2.3 新プラトン主義的思考に対する対話篇『ブルーノ』の関係

バイアヴァルテスは、このような「単に暗示されただけのシェリングの同一哲学とプロティノスとの類比」の解明から、さらに「対話篇『ブルーノ』に関して具体的に証明される新プラトン主義的思考との諸連関」の解明へと進む（cf. ID 221）。

2.3.1 『原因論』抜粋と対話篇『ブルーノ』

ブルーノ『原因論』の抜粋は普遍的な原因および原理、世界霊、質料、一者に関するブルーノの発言を含んでいる。すなわち、宇宙は一であり、可能性と現実性との同一性であり、宇宙において最大のものは最小のものと区別されず、一者は自らを展開するにもかかわらず中心そのものであり、普遍的知性として理解されるものであると同時に理解するものである。『抜粋』で言及されている問題の領域を単にこのように列挙するだけで既にシェリングの『ブルーノ』との事柄上の類似は明らかであるように思われる（cf. ID 221–223）。

2.3.2 ブルーノの一元論：クザーヌスとの比較

ところで、この両者の類似の中核にあるのは〈対立の統一〉の思想であるが、ブルーノはこの思想をクザーヌスの影響下に受容した。クザーヌスの〈反対の一致（対立の統一）〉の原理はブルーノにとっても根源的存在者である神ないし一者を解釈するための鍵である。しかしまたこの原理はブルーノにとっては世界を解釈するための鍵ともなっており、ブルーノをクザーヌスから分かつのはまさにこの点である。確かにブルーノは単純に神、絶対

的原理と世界を無差別に同一視しているわけではない。しかしブルーノの主な関心は、神そのものではなく、世界との関係における神、世界、宇宙、自然における神の遍在に向いており、その限りにおいてクザーヌスやプロティノスが強調していた神あるいは一者の超越は背景に退いてしまう。ブルーノの一元論（モニスムス）と呼ばれてきた思想傾向——〈あらゆる存在者は実体の面から一である〉、〈一なるものは宇宙である〉、〈一にして全（ヘン・カイ・パーン）〉など——は、彼のこの独自の関心から説明されうるのである（cf. ID 227, 229）。

2.3.3 ブルーノ受容の前提としての『超越論的観念論の体系』

一方、シェリングにとっても対立の統一の思想は未知のものではなかった。というのも、既に1800年の『超越論的観念論の体系』（以下『体系』と略）においてシェリングは対立するものの統一（主観と客観の同一性）という主題に取り組んでいたからである。しかしそこでは彼はもっぱら超越論的意図に従って、この統一を絶対者においてではなく、人間の意識、特に芸術制作において明らかにしようとしていた。ブルーノの〈対立の統一〉の思想はシェリングのこの本来の意図に偶然にも適合していたと言える。バイアヴァルテスによると、『体系』を根本から既定していたこの意図が、まさにブルーノとの接触によって強められ、拡張され、絶対者の統一の問いに向かって集約されてゆくことになる。「シェリングは対立における統一の思想を既に『体系』において特定の領域に対して根拠づけることができたとしても、彼が絶対的統一を一者として考えたこと、世界や有限な認識と一者との関係を「…」このように先鋭化したことは、明らかにブルーノ哲学によっても制約されていた」のである（cf. ID 229–232）。

2.3.4 ブルーノとシェリングの差異

問題の共有と解決の相違 『ブルーノ』においてシェリングは絶対的同一性という超対立的な一者を主題としたが、これによって彼はブルーノを介して新プラトン主義的な思想をカント由来の超越論的思惟の文脈の延長線上に受容したと言える。しかしこれによって超越論的哲学は再び一なる原理への形而上学的問題を追究することになり、結果として一見すると、シェリングの同一哲学はブルーノの新プラトン主義に限りなく接近するように見える。しかし「この問い〔一者をめぐる問い〕のシェリングの解決は、ブルーノとの自発的結合にもかかわらず、ブルーノから本質的な諸側面において区別される」のである（ID 234）。

シェリングの問題：有限者の由来 シェリングの同一哲学において——ゆえに『ブルーノ』においても——反復される問いは〈絶対的統一は数多性に対して、あるいは、無限なものとは有限なものに対していかなる関係をもつのか〉、〈有限なものはいかにして現実存在に至るのか〉という問いである。シェリングは無限から有限への連続的移行は〈真の哲学〉に

として考えられえないというテーゼに固執する。結果として一つのアポリアが生じる。つまり、絶対的統一は時間的に展開された原像の似像（現象界）を定立するが、このために無限なものから有限なものへの移行は仮定されえないのである。絶対者が自己を自発的に展開するような、無限から有限への連続的な移行は考えられない以上、シェリングはこのアポリアを〈分離〉という概念によって解決しようとする。この概念によってシェリングが明らかにしようとしているのは、この運動の根拠は絶対者ではなく分離するものの自由にある、ということである (cf. ID 234–236)。

有限者の一者への還帰 したがってこの〈分離〉は、絶対者の本質に関わるのではなく、ただ絶対者の本質から自身を分離したものにとってのみ定立されている〈分離〉である。有限なものが存在することは、それゆえ、絶対的同一性が自己から歩み出たことを意味しない。絶対者はその絶対性を有限的なものの出現によって廃棄したわけではない。絶対者はむしろ、同一性とは異なるものの現存にもかかわらず、純粋な同一性にとどまり続けている。実を言えば、絶対者がこのような在り方をしているからこそ、有限なものも存在するのである。というのも、分離されたものですら、それがそこから分離した絶対者から、自らの統一の根拠を得ているからである。絶対者はあらゆるものの内に現前していることによって、一なるものへ有限なものが還帰するための、有限なものに内在している根拠となっているのである (cf. ID 236–237)。

シェリングの反=汎神論的傾向：ブルーノとの比較 一元論とそれによって示唆されている宇宙の完全性の強調のゆえに、ブルーノが神の受肉による歴史的救済というキリスト教思想に反感を抱いたということは十分に考えられる (cf. ID 229)。しかしシェリングは、ブルーノの反感とは裏腹に、有限なものは〈自分の意志によって受苦する、時間の制約に従属する神である〉と述べている。このように有限なものを貶めることはブルーノには思いもよらなかったであろう。バイアヴァルテスによると、このようなシェリングの有限なものの理解とそれに基づく「有限なものの分離と還帰についての問いの展開は、〈世界と神を直接的に同一のものとして定立する粗雑な汎神論という嫌疑が、シェリングに対しては不適切である〉と証明している」(ID 236–237) のである。

プロティノスへの回帰 シェリングが読むことのできなかったブルーノの他の著作とは反対に『原因論』は、もしシェリングがそれに全面的に従っていたとするならば、彼をむしろ一なるものから多なるものへの連続的移行という構想へと導きえたような内容をもっている。しかしシェリングは絶対者からの有限なものの分離という彼の思想に導かれて、ブルーノのような世界と神の同一視へと向かわなかった。バイアヴァルテスによると、このような絶対的統一の不変の純粋性というシェリングの主張はむしろ〈一者は万物の根源

であり、それ自体として自己の内にとどまる」というプロティノスの思想を正当に継承するものであると考えられる。プロティノスによると〈一者は展開されていると同時に展開されていない〉のであり、〈ただ自己の内にとどまるものとしてのみ、一者は、そこへとあらゆる発出したものが再び戻る、円の中心でありうる〉のである (cf. ID 238)。

2.3.5 バイアヴァルテスの結論

以上の考察をバイアヴァルテスは次のように総括して論を終えている。

本質的な事柄の側面と表現の特徴的形式においてシェリングとブルーノとの類縁性が示されたにもかかわらず、もちろんシェリングはブルーノの形而上学的な、あるいはそれどころか宇宙論的な意図を一種の〈汎神論〉の方向へ推し進めた、とは言えない。むしろシェリングは、この哲学的殉教者の思想における神学上の異端的要素を、シェリングを新プラトン主義的哲学と結びつけている、まさにそのような諸要素によって退けたように思われる。このことは〈反対の一致〉にもあてはまるが、それは、彼が〈反対の一致〉をもつばら絶対者の構造としてのみ考え、同時に有限かつ無限な宇宙の構造としては考えていないからである。しかしこのことは同一性（絶対者）と世界との関係にもあてはまる。シェリングは、彼固有の問題の展開において、彼に知られているブルーノのテキストの傾向に全面的に従ったわけではなかったが、それはシェリングにとって無限なものは、たとえ無限なものが世界《なしにはなく》、世界が絶対的に無限なものなしにはありえないとしても、あらゆる対立の無差別として自分自身を世界に対して徹底的に保持しているからなのである。(ID 240)

3. 研究の現状と今後の展開

3.1 バイアヴァルテスの研究の成果

バイアヴァルテスの研究は、シェリングの『ブルーノ』が新プラトン主義の系譜に連なり、その思想史的文脈——特にブルーノの『原因論』との関係——を抜きに理解しえないことを明らかにした点で、研究史上極めて重要である。またその際に決して理解しやすいとは言えないシェリングの同一哲学の体系を三重の自己反省的構造を軸にして捉え、その簡明な叙述に成功していること、ブルーノとの差異に注目し、通説に反してシェリングの同一哲学における反=汎神論的傾向を指摘していること、さらにこの傾向をプロティノスへの回帰として解釈していることなど、興味深い論点を提起している。さらにブルーノ思想受容の前提として『体系』の芸術哲学に言及している点も見逃せない。

3.2 バイアヴァルテスの研究の展開

しかしバイアヴァルテスの研究（『同一性と差異』）はその方法上、意図的に主題を限定したものであり、彼自身も認めているように、「シェリングの『ブルーノ』に関する完備した、あるいは思考の運動の全てを反省する解釈」ではない。また彼の研究は、シェリングの『ブルーノ』と新プラトン主義との類縁性の解明を主眼としているために、あらゆる場面において可能な限り多くの類縁性を発見しうるように、両者の哲学体系を比較・対照することや、思想史的背景や著者の意図などを全体として主題とするのを避けるという戦略をとっていた。もちろんその豊かな成果が示しているように、この戦略は直ちにバイアヴァルテスの研究の欠陥を意味するわけではない。しかしバイアヴァルテスの研究の成果をふまえて、さらにそれを一步先に進めていこうとすると、彼が自らの研究に課していたこのような制限を徐々に撤廃していくことが不可欠の作業の一つとならざるをえないだろう。実際、バイアヴァルテス自身の問題意識にも、そのような展開の可能性が最初から含まれていたとも言える。なぜならば、バイアヴァルテスはブルーノの『原因論』とシェリングの『ブルーノ』との間に、歴史上唯一とも言える思想の継承関係を認め、シェリングによるブルーノ哲学の「各人 [=シェリング] の思考を引き続き規定し続ける産出的獲得」と「〈同一哲学〉の地平におけるブルーノの中心思想とその新プラトン主義的含意の変形」とについて語っていたからである。しかしこのような「獲得」や「変形」の内実の十全な解明は、そのプロセスを最初から最後まで詳細に追跡することによってのみ成し遂げられるのである。その際には、シェリングに固有の意図や当時の思想史的背景を捨象することは許されないし、最終的には「シェリングの『ブルーノ』に関する完備した、あるいは思考の運動の全てを反省する解釈」も視野に入れざるをえないであろう。

3.3 研究の具体的方向性：ヤコービ『スピノザ書簡』への注目

バイアヴァルテスも指摘しているように、シェリングによるブルーノの『原因論』についての知識は、ヤコービの『スピノザ書簡』第2版の付録である同書の抜粋に基づいている。この事実に立脚し、シェリングによるブルーノの思想の受容をバイアヴァルテスがしているように歴史的文脈を捨象することなく、18世紀後半のドイツにおける歴史的出来事として考察することが、先のプロセスの全容解明というさらなる課題に取り組む際の一つの具体的な方向性ないし着手点として考えられるであろう。つまり、これもバイアヴァルテスが指摘していたように、『ブルーノ』には『原因論』に由来するとしか考えられない際立ってブルーノ的な要素と、同書には見出されない非ブルーノ的な要素とが複雑に絡み合いながら併存している。しかしこの異質な要素の併存を引き起している原因の一つは（最終

的にそこにシェリングの独創性が関与しているのは当然であるとしても）ヤコービという媒体の介在に求められる⁽³⁾。言い換えると、シェリングにとって受容の対象となったブルーノは、最初からヤコービの設定した文脈（それは一般に汎神論論争と呼ばれている）にあり、『スピノザ書簡』の他の構成要素（特にスピノザやヤコービ自身の思想）と不可分な一体をなしており、このような異質な要素の混合が、単にブルーノの思想を不純にするのではなく、18世紀後半のドイツの思想状況におけるその復興と、さらにシェリング独自の新プラトン主義の形成に寄与したと考えられるのである。

註

- (1) ブルーノとシェリングの思想的連関についての本格的研究としては、他に西川（1960）などがあるが、ここでは取り上げる余裕がなかった。なおプロティノスとシェリングの思想的連関については、Beierwaltes（2001, 2004）にも詳細な論述がある。また Beierwaltes（1980）からの引用等は、(ID 76) のように、略号 ID と頁数を併記して示す。
- (2) 原題『モーゼス・メンデルスゾーン氏宛の書簡におけるスピノザの教説について』。ヤコービの抜粋はイタリア語の原典からのドイツ語訳で、意識と言ってもよい箇所を相当数含むものである。
- (3) 例えば、Otto（2004）はこのような観点に立脚している重要な文献であると考えられるが、その詳細な検討は別の機会に譲りたい。伊藤（2002）も（ただしヘーゲルに関して）新プラトン主義受容の媒体としてのヤコービに注目している。

文献

- Beierwaltes, W. (1980). *Identität und Differenz*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- (2001). *Das wahre Selbst*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- (2004). *Platonismus und Idealismus*, 2nd edition, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- 福谷茂 (2009). 「〈哲学史〉という発明」, 『哲学史の哲学（岩波講座哲学 14）』(27–55 頁), 岩波書店.
- Halfwassen, J. (1999). *Hegel und der spätantike Neuplatonismus : Untersuchungen zur Metaphysik des Einen und des Nous in Hegels spekulativer und geschichtlicher Deutung*, Bonn: Bouvier.
- 伊藤功 (2002). 「ヘーゲルと一者の形而上学—ヤコービ「ブルーノ抜粋」を通じたヘーゲルと新プラトン主義との出会い」, 『新プラトン主義研究』, 第2号, 63–80 頁.
- (2014). 「展開と フィヒテ、シェリング」, 水地宗明・山口義久・堀江聡編, 『新プラトン主義を学ぶ人のために』(360–364 頁), 世界思想社.
- 小手川正二郎 (2014). 「展開 o レヴィナス、デリダ」, 『新プラトン主義を学ぶ人のために』(376–384 頁).
- Merlan, P. (1967). 'Neoplatonism,' in P. Edwards (Ed.), *The Encyclopedia of Philosophy*, vol. 5 (pp. 473–476), London: Collier-Macmillan.
- 水地宗明 (2014). 「新プラトン主義のアウトライン」, 『新プラトン主義を学ぶ人のために』(3–18 頁).
- 西川富雄 (1960). 『シェリング哲学の研究』, 法律文化社.
- 納富信留 (2014). 「展開 α プラトン哲学の徹底と逸脱」, 『新プラトン主義を学ぶ人のために』(19–23 頁).
- 岡崎文明 (1998). 「序論—西洋哲学史への新プラトン主義の影響」, 新プラトン主義協会編, 『ネオプラトニカー新プラトン主義の影響史』(1–17 頁), 昭和堂.
- Otto, S. (2004). 'Das „Symbolum der wahren Philosophie“ : Die *nolana philosophia* und ihre Vermittlung durch Jacobi an Schelling,' in R. Adolph & J. Jantzen (Eds.), *Das antike Denken in der Philosophie Schellings* (pp. 545–578), Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann-Holzboog.

〔京都大学大学院博士後期課程・西洋哲学史〕